熱砂の国の舞姫と緑の国の王

かるねす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
熱砂の国の舞姫と緑の国の王

【Ｎコード】
Ｎ７７８８Ｔ

【作者名】
かるねす

【あらすじ】
◆初投稿です。よろしくお願い致します。
熱砂の国に生まれた踊り子は、そのとき、死に瀕していた。生きたい、と強く願った彼女の想いを受け止め、男は言う。「遙か彼方、緑深き国で生き、お前は何を成すのか」と。
シリアス成分多めに、恋愛・ファンタジー要素を盛り込み展開していきます。
※魔法が存在する、アラビアと中世ヨーロッパ辺りの国をイメージした架空の世界での物語になります。

1．はじまり

目の前に広がるのは、荒れ果てた黄金色。　強い風が吹けば、砂粒がごうごうと巻き上がって視界を塞ぐ。
そんな中を、襤褸を纏った少女が足元もおぼつかない様子で歩いていた。

――喉、渇いた…。

振り返っても、人っ子一人見当たらず、自らの足跡さえこの砂漠には残っていなかった。　最早、引き返すことも出来ない。

――引き返す？　そんなこと、出来るわけない！

振り返った自分を奮い立たせるかのように、頭を振る。
ひどく喉が渇いていた。　日差しも決して弱まることなく、じりじりと襤褸で隠した肌を傷つけていく。　もう、限界だった。
少女の膝から力が抜けると、さらさらとした砂の上に倒れ伏す。

――…死にたく、ない……。

そう唱えていても、視界はゆっくりと暗くなっていく。　確実に、少女の死は近づいてきている。
しかし、少女は強く強く願った。
持てる力全てを込めて、砂粒を握り締めて祈った。

「…小娘、お前はそんなに死にたくないか」

幻聴だろうか、人の声が聞こえてきた。

顔を上げることは出来ないものの、緩く首を縦に振る。

「ならば、お前に生き延びるチャンスをやろう」

その声に、ようやく少女は顔を上げた。　瞳には人影が見えるものの、逆光でよく見えない。　しかし、声から男のように感じられた。少女の汗の浮いた頬から、ぱらぱらと砂が落ちていく。

「この、砂に覆われた灼熱の大地から遙か彼方にある世界だ。　そこへお前を送ってやろう。　……そして、そこでお前が何を成すのか、私はお前の傍で見守らせてもらおう」

「……わ、たしが…？」

驚いたように目を見開き、少女はかすれた声を上げた。　喉の渇きは変わらないものの、その瞳には生命の輝きが宿っている。

「ここより遙か西、トルト山脈を越えた先には緑の国が広がっているという。　昼夜問わず、優しい風が吹き、冷たい水が満ち溢れ、緑が芽吹いているその国は、お前の目にどのように映るのだろうな？」

水、と聞いた瞬間、少女の喉がごくりと鳴った。　その様子を見て、男はすっと目を細める。

「……小娘、名を。　お前の真名をもって、契約を」

「……、ふぁ…っ」

乾ききった喉が声を出すことを拒否しているのか、少女が唇を開いても、その隙間からはヒューヒューと空気が漏れるだけだった。

「……ヒトとは、こうも不便なものか…。　声に出さずともよい。
心で応えよ」

――ラティーファ、と申します。　貴方は…？

そう問いかけながら、少女はゆっくりと体を起こそうともがく。
そのとき、日差しが少し弱まったような気がした。

「ラティーファ」

男が声に出して少女の名を呼んだ瞬間、ふわりと少女の体が浮く。
何が起こっているのかわからない、とばかりにラティーファは何度も瞬きを繰り返した。

「契約は成った。　これより私はお前を守護する者。　……共に、新しい地へ行こう」

男の姿が揺らめいたかと思うと、ラティーファの体の回りに白煙と化して絡まっていく。　徐々にそれは緩やかに首に巻きついて、黄金の環と形を変えていった。
と、同時に、灼熱に輝く空が急激に光を失い、ぽっかりと暗闇に覆われた空間が現れた。　強い力でそこに向かって引っ張られる。

残された力で、ラティーファは手を伸ばした。　―しかし、それは何も掴むことはなく、ただただ空を切り、そのまま現れた暗闇へと吸い込まれていった。

2．青に溺れる

今まで肌を焼いていた熱が全く感じられず、むしろ体はひんやりとした液体に包まれているように感じる。
ラティーファが薄く唇を開くと、その隙間から、ゴポゴポと音を立てて気泡が漏れていった。　カラカラに渇いていた口内が水分に満たされていく。

――ここは、どこなんだろう……？

目を開くと、そこに映るのは青、青、青……――。
自分が吐いた息が、銀色の泡となって浮かんでいくのが見えた。
そこで、ラティーファの意識が完全に覚醒する。

――早く、早くここから出なければ！！！　溺れてしまう……！！！
泡が浮き上がっていった方向に、慌てて手を伸ばし、必死に水をかきわける。　徐々に青かった視界に、銀色と金色の光が増えてくると、ラティーファの手にも力が増した。

「ぷはっ」

胸を上下させながら、辿り着いた場所をきょろきょろと見回す。
と、同時に周囲から、フードを被った男達のどよめきが聞こえ、遠慮のない視線が投げかけられた。

澄んだ水面を反射させているのだろうか、暗い石造りの部屋にも関わらず、壁には水色の光がゆらゆらと揺らめいている。　よくよく見れば、壁面だけでなく天井にも床にもびっしりと魔法言語と魔法陣が描かれているようだ。　そしてそれは、既に発動した後なのだろう、赤い光が徐々に失われていくのが見えた。

「あの……」

「成功じゃ！！！　ついに召喚に成功したぞ！」

フードの男のうち、一番ラティーファの近くにいた人物が声を上げる。　彼女の声は聞こえていないようであった。

「しかし、バインツ殿……召喚された者の姿は、神子というより、伝説の魔人……」

「言うな。　いくら、魔人と似ているとはいえ、わが国に召喚されたのだ。　存分に力を振るってもらおう」

バインツ、と呼ばれた男がどうやらこの男達の中心人物らしい。そして、彼の目がようやくラティーファに向いた。

「ようこそ、グリューエルン国へ。　救国の神子殿」

「え……？　わ、私は…っ…」

思いがけなく水の中で体温を奪われていたのだろう、発した声は震えていた。　雫が黒髪を伝い、ぴちょん、と小さく音を立てる。

「我々は、貴方を歓迎しますよ」

響く言葉とは裏腹に、その声音と向けられた視線は冷たいものだっ

た。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

水―召喚の泉と呼ばれているものらしい―から引き上げられたラティーファは、改めて辺りを見回した。
さっきまで水に浸かっていたせいで分からなかったが、この空間自体の空気も冷たいものらしい。　ぺたりと地面に座り込んだまま、自らの体を抱きしめるようにして震えた。
と、温かく柔らかなものが体を包み込む。　見上げるとフードの男の一人が厚手の毛布をかけてくれたようだ。

「……ありがとう」

震える声ではあったが、男はほっと息をついて離れていった。

「さて、神子よ。　貴方はどんな力をもっているのであろうな？」

その言葉に、ラティーファは考え込んだ。

「私は…神子などではありません。　ただの死にかけていた踊り子です。　踊る以外に、何の力もない…無価値な女なのです」

「ほう……？」

バインツの目がすっと細められる。　たったそれだけで、周りの空気がさらに冷たくなった気がした。

「どうしてこんなことになったのか……私にはわかりません。　ただ、貴方が求めている救国の神子というものについて、私は全く知らないんです」

「……ふむ…貴方の言っていることに嘘はないらしい……が」

壁面を彩っている魔法言語を一瞥すると、バインツはすぐにラティーファへと視線を戻した。

日光で焼けたのだろうか、この国では滅多に見ることがない浅黒い肌と、不安げな色を宿した菫色の瞳、そして腰まで伸びた艶やかな黒髪の少女は、とても華奢で、どう考えても彼の脅威とはならないような気がする。

しかし――。

「貴方の容姿は、わが国ではいささか目立つようだ。　……どちらにせよ、もう暫くはお付き合いいただこう」

その言葉に、ラティーファは頷くしかなかった。

3．フードの男

暗いあの部屋は、どうやら地下に造られた神殿だったらしい。
激しい疲労感と空腹感から立ち上がることさえ出来なかったラティーファは、毛布をかけてくれた人物に抱えられ移動していた。
がっちりとした腕の中で、ラティーファはただただ身を硬くするしかできず、そっと目を伏せる。

――どうしてこんなことになったんだろう……？

未だに自分の身に起こったことが信じられず、無意識のうちに溜め息をついてしまう。　一番近くにいる人物でさえ、こちらを一瞥しただけで大した反応は返ってこなかった。

体を温めるはずの毛布は、水分を吸い取って重く、冷たくなっており、徐々に体温を奪っていく。　それだけでなく、心が冷えていくような気がしていた。

「……大丈夫ですか？」

さすがに様子がおかしいと思ったのだろう、足を止め、ラティーファへ声をかけてきた。　思っていたよりも、聞こえてくる声は若い。

「……す、すみま、せ、っ…」

思っていたよりも体温は下がっていたようで、奥歯がカチカチと鳴ってしまった。　それを聞いた男は、失礼、と小さく声をかけると、ラティーファの体を一旦地面に下ろす。　素足にヒヤリとした石の

感触が触れた。

「これ以上、体を冷やすのは良くない。　その毛布はこちらへ。代わりにこれを」

フードのついたローブを脱ぐと、目の前には金に輝く髪を持つ男が現れた。　やや長めの前髪からは、優しげなエメラルドの瞳がのぞく。　相手から感じる気遣いに、心が少しだけ温かくなった。

毛布を取ると、元々身につけていた衣服の生地が薄いことを改めて感じさせられる。　受け取ったローブを身につけると、男の体温が残っていて少し気恥ずかしくなってしまった。

「私のもので申し訳ないのですが、あと少しなので我慢してくださいね」

とんでもない、と言おうとした瞬間、再び抱え上げられてしまい、その言葉は喉の奥へと消えてしまった。

++++++++++++++++++++++++++

案内された部屋は、ラティーファが今まで見たことのないような、とても豪華な部屋だった。　毛足の長い真っ赤な絨毯が敷き詰められ、一つ一つの調度品は精巧な細工が施されている。　もちろん、周りにいる人物達も、仕立てのよい柔らかな衣服に身を包み、肌は白い。

明らかに、ラティーファは浮いている。　黒い髪はしっとりと湿っており、旅を続けていた体は強い日光に容赦なく焼かれ、身に纏っていた衣は傷のある肌を隠すにはその面積は全く足りていない。今までこの格好で踊ることはなんとも思っていなかったが、急に恥ずかしくなっていた。

「さて、神子殿」

目の前にいる人物達は、皆素顔を露わにしている。　今、声をかけてきたのは、あの場所でバインツ、と呼ばれていた人物の声だった。　年齢は５０歳を越えているだろうか、顎には立派に整えられたグレーの髭があった。

「貴方は、自分を無価値だと評価しているようだが……それを判断するには、我らにはいささか情報が足りぬようだ。　是非、貴方のことを語ってもらいたい」

「私のこと、ですか……」

ごくり、と喉を鳴らして己を囲む人々を眺める。　それぞれ表情は

違うものの、一様に感じられるのは好奇に満ちた視線だった。
こんな視線には慣れている…はずだった。　しかし、体の震えが止まらない。　口を開いてもぱくぱくと動くだけで、声にすることができない。

「バインツ殿、お止めください。　彼女は今、とても話せる状態ではないはずです」

低く静かだが、はっきりとした声が聞こえてきた。　先ほど己を抱えてくれた人物の声である。

「リヒルか。　しかしな……」
「ようやく念願の救国の神子が現れて、気が急く気持ちもわかりますが……それで、彼女が倒れてしまっては、国は救えないでしょう？」
「うむ…そうだな……」

リヒルと呼ばれた男は、バインツの言葉を聞くと微笑みを浮かべ、ラティーファの手を取った。

「ただ、名前くらいは教えていただけると嬉しいのですが……お許しいただけますか、レディ？」

下がっていた熱が急に頬に集まるのを感じながら、ラティーファはやっとの思いで自分の名前を告げた――。

3．フードの男（後書き）

まだまだ王様出てきません……。次の次くらいで出せると思うのですが…！

4．過去【前編】（前書き）

この話は、流血表現など、残酷な表現が含まれています。
また、ラティーファ視点で話が進んでいきます。

4．過去【前編】

私は、この熱砂の国のバリバーダという街で生まれました。
昼間は暑くて、夜は寒い…そんな中で父と母と三人、とても貧乏だったけど毎日楽しかった……そう、あの時までは。

ある日、盗賊が街を襲ったのです。
家々から火が上がり、大きな曲刀を持った男達が人々を追いかけていました。　どんな人物であっても、捕まれば嬲り殺されるのでしょう。
もちろん、私も父や母と一緒に逃げました。

「きゃあっ！！」
「ラティーファ！」

父と母の手を握り、懸命に走っていましたが、私は何かに足をとられ二人の手を放してしまいました。　足元を見ると、転がっているのはいつも笑顔で店を切り盛りしていた近所のおじさんらしき体……。　彼の体には、首から上がなかったのです。
恐怖のあまり、声が出ませんでした。　父母と逃げているときもどこか非現実的だと思っていたのに、メラメラと燃える火の熱と足元

にある首のない死体……それは、これが現実だということをはっきりと告げていました。

「父様、母様…っ！！」

二人の姿が見えなくなったことに、急に不安が押し寄せてきます。
辺りを見回しても人の波と、何かが焼ける匂い、そして死体――。
探すことは非常に困難でしょうが、幼い私は両親の姿を探さずにはいられませんでした。

「どこ…！？　どこぉ…っ！？」

さっき転んだときに出来た擦り傷も、この恐怖と混乱の中では全く無意味でした。　それほど感覚は麻痺していたのです。
――そして、ついに……。

「父様！　母様！　よかっ…」

たった僅かな間ではあったものの、はぐれていた両親と再会できました。　ほっとした表情が見えたのはほんの一瞬で、二人の目は大きく見開かれ、恐怖に彩られるのがはっきりと見えたのです。
その原因がわかったのは、次の瞬間でした。

「ほう……まだ、生き残りがいたか」

地を這うような、低い声。　とてもねっとりしていて、まるで蔦のように体に絡み付いて私の動きを拘束しているようでした。

「ラティーファッ！！　逃げてぇぇぇっ！！！」

母の叫びが聞こえたかと思った次の瞬間、私の膝はがくりと折れ、地面に膝をつきました。　ヒュッと空気を切る音が聞こえ、頭の上を何かが通り過ぎていきます。　――曲刀でした。

「かわしたか……運のいいガキだ」

くくく…と喉を震わせて笑っている声が聞こえてきます。　両親も私も、一歩も動くことは出来ませんでした。

「女とガキは連れて行け。　男は殺せ」

聞こえてきた言葉に息を飲み、慌てて両親を助けようと立ち上がろうとしました。　しかし、大柄な男が遮り、私を抱え上げました。

聞こえるのは、父をかばおうとする母の声と、その母を逃がそうとする父の声だけです。

そして次の瞬間。

「逆らうやつは必要ない。　その女も殺せ」

「いやあああああ！！！！！！」

「や、やめろおおおおおお！！！！！」

聞こえてきた両親の断末魔と、ボタボタと地面に落ちる液体の音、重たいものがどうっと倒れ伏す音――。

「あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！！！！！」

私の口から出たのは、最早獣の咆哮のような声。　次の瞬間、意識は闇へと落ちていきました。

++++++++++++++++++++++++

――その後のことはよく覚えていません。

目覚めたときには父も母もおらず、黒い檻の中に私はいました。
遠巻きに色々な声は聞こえてきましたが、それらが決して聞いていていいものだとは思いませんでしたし、聞きたいとも思いません。
ぼんやりと枷が付けられた手と、せわしなく動き回る人を見るだけの毎日。
何日その状態でいたのか、考えることもしませんでした。

――正直、その頃の私は、死んでしまいたかった。　どうしてあのとき、両親と一緒に殺してくれなかったのだろう、とあの盗賊を恨んだこともあります。

そんな抜け殻のような私を買ってくれたのは、ある旅の一座の女性でした。

「座長、私、この子がいいわ」
「……フューリ、もっとマシな奴がいるだろう。　こんなひ弱な者では……」
「いいえ。　この子じゃないとダメよ。　ね、お願い」

そんなやりとりが行われていることにも全く無関心だった私は、このときもどこか遠くを眺めていました。

「ねえ、貴女。　名前を教えてくれないかしら？」
「……」
「ちょっと、聞こえていないの？」
「……」

「ねえ！」

痺れを切らしたのか、女性が大きな音を立てて檻を叩きます。
その音で我に返った私が目にしたのは、痛みに涙目になった女性の姿と、困ったように眉を下げた男性でした。

「……あの…大丈夫、ですか…？」
「大丈夫じゃないわよ！　全く……で、貴女の名前は？」
「ら、ラティーファ…です」
「ラティーファ、いい名前ね。　ラティと呼んでもいいかしら？」
「え……？」

私の目に映ったのは、柔らかな水色の長い髪と、甘く垂れた金色の瞳。
泉の精かと思いました。　彼女は私に言いました。

――貴女は、これから私と一緒に旅をするのよ、と。

それから、私はフューリの世話係として旅の一座に加わることになりました。

5．過去【後編】（前書き）

この話は、流血などの残酷な表現を含んでいます。
また、ラティーファ視点で話が展開していきます。

5．過去【後編】

彼女―フューリ―は、踊り子で、一座の花形でもありました。
彼女が舞えば、たちまち水が湧き出し、雨が降り、彼女が高らかに歌えば、柔らかな風が吹いて、花が降る。　……あぁ、私達の国では滅多に雨が降らないのです。
それが私達、熱砂の国に生きる者にとって、どんな力か想像できますか？　名誉・財・地位…何でも手に入る能力なのです。
しかし、フューリはそれを望んでいませんでした。

「ねえ、ラティ」
「なぁに？」
「貴女は、私のような力が欲しい？」
「え……？」

ある日、舞台が終わったあと、彼女の髪を梳りながら尋ねられました。

「舞ったり、歌ったりすることで、天候を操る力」

真顔で聞くフューリを鏡越しに見た私は、これはまじめに答えないといけない質問だと察知しました。　手を止め、首を捻ります。

「うーん……どうかな」
「どうって？」
「人を救える力があるのはいいことだけど、それよりも私はフューリのように踊れるようになりたいよ」
「……あははっ！　そう、そうなの…」
「！　な、何で笑うの！？　私、真面目に答えたのに！！」

初めは肩を震わせていただけなのに、一度吹き出したら止められなくなったのか、フューリは大爆笑し始めました。

ひとしきり笑ったあと、フューリは柔らかな唇に指を当てて、私をなだめるように頭を撫でます。

「ラティは、踊るのは好きかしら？」
「うん、大好き！」
「それじゃあ、これはラティがもっともっと踊りが好きになるようなおまじないよ。　――貴女にアメアト神のご加護がありますように」

額に何か触れたと視線だけ上げて見てみると、彼女が唇をつけているのが見えました。　――それ以降少しだけ、ステップを踏む足が軽くなったような気がします。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

私達のような旅の一座は、単独で旅をすることができません。一面が砂だらけで、次の街への道を知っているのは商人達だけなのです。　だから、一つの街で公演が終われば次の街へ行くためにキャラバンに声をかけます。

しかし今思えば、あの時は、どのキャラバンも様子がおかしかった……。

声をかけても知らぬふりをするのは当たり前。　中には罵声を浴びせてくる者もいました。

これでは交渉することが出来ないと思った私は、座長に知らせに戻ったのです。

何となく嫌な予感がした私の足は、街外れにあるテントに向かって自然と速くなり、遂には駆け出していました。

「なに、これ……！？」

テントの前には、仲間たちの変わり果てた姿。　あの時――両親が死んだあの日から５年、私も１８になっていました。
震える手を握り締めて、息のある者を探しました。

「ラティ、ファ……」
「座長っ！！」

座長のグレーの髪が血で赤く染まり、腹部に刺されたナイフの隙間からも止めどなく流れていました。

「い、一体何が……！？」
「盗賊だ…まだ、奴らが近くにいるかもしれん……っ早く、にげろ」
「でも！！！」
「フュ、リがいないんだ……ここは大丈夫だから、さがして、くれ…」

だんだん細くなっていく座長の息。　私は唇を噛んで頷くと街に向かって全力で走り始めました。
――今度は、一人でも多くの仲間を救うために。

しかし、次の瞬間、あのときの絶望が私を襲います。　目前に迫った街からは、火の手が上がり、人々の叫び声と、盗賊たちの罵声が聞こえてきました。

――怖い、怖い、怖い……っ！！！！

がくがくと震え始めた足は、縫いとめられたように動かなくなって

しまい、私はその場へしゃがみこみます。

――しに、たくない……！！！！　嫌……ッ！！！　死にたくないッ！！！！

頭の中はそれでいっぱいでした。

――仲間を助ける？　助けを呼ぶ？　嫌だ！　まだ死にたくない！

……いや……逃げよう……。

恐怖に覆い尽くされた私の心は、私を助けてくれた人たちを見捨てて逃げることを躊躇いもなく選んだのです。

そして、そんな恩知らずな私に似合いなのは、砂漠でカラカラに干からびて無残に死んでいくことだと、思っていたのに……。

6．世話係（前書き）

大変遅くなりました。
これからまた少しずつ展開させていきます。

6. 世話係

燭台に灯された青白い火がゆらりと揺れている。　いつの間にか日が落ちていたのだろう、室内は決して暗くはないが寒々とした色を帯びていた。
一つ一つの言葉を丁寧に語り終えたラティーファは、ケホケホと小さく咳をし、乱れた呼吸を整える。

「……私は、恩人を見捨ててここへ来ました。　ここへ来たのも私の力によるものではありません」
「ふむ……熱砂の国、か……」

グレーの髭を撫でながら、バインツは思考を巡らせていた。
菫色をした少女が語った気候の国があるのは知っているし、彼女のような肌の色が濃い人種も見たことがある。
彼が何より気になるのは、少女が語ったフューリという人物のことだった。

「バインツ殿。　神子殿は来たばかりで混乱しているはず。　ならば、暫く様子を見てみるのもいいと思いますが？」
すっかり萎縮してしまっているラティーファを見ながら、リヒルは努めて穏やかな声で言った。
「……そうだな。　では、神子殿、今日はこの辺にしておこう。……ジェニに世話をするよう、言っておいてくれ」
「わかりました」
リヒルの提案に感謝しながら、部屋を去っていくバインツたちを見送ると、声音と寸分変わらないような穏やかな表情を浮かべたリヒルが、そっとラティーファの頭を撫でる。
「辛い過去だったのに、語ってくれて本当にありがとうございました。　この後、貴女の身の回りのことを任せる者を呼んでありますので、その者に任せてゆっくり休んでくださいね」
「あ、あの……私っ…あ、あれ……何で……！？」
視界がじわじわと滲んで、冷たい雫が両頬を伝っていく。　瞬きをすると握り締めた拳に涙が零れ落ち、弾けた。
「辛い経験をしてきた貴女の傷をえぐるような真似をしてしまった……どうか、私たちを許してください」
椅子に腰掛けているラティーファの足元に跪くと、どこからともなく出したハンカチでその涙を拭う。
エメラルドの瞳が、悲しげに揺れた。

そこにノックの音が聞こえる。　音もなくドアが開くと、スラリと背の高い女性が現れた。
と、同時に女性の目がみるみるうちに大きく見開かれ、弾かれたようにこちらへ駆け出した。

「り、リヒルーーーーーー！！！！！！　貴方、また女の子を泣かしてるのねーーーーーー！！！！！！！」
「じ、ジェニ！？　こ、これはちがっ」
「問答無用！！！！！！」

その言葉と共に、リヒルの身体は綺麗に蹴り飛ばされ、絨毯の上に沈んだ。　目の前で繰り広げられる非現実的な出来事に、ラティーファの目から流れ落ちる涙は止まり、ぽかんとした表情で二人を交互に見る。
ぱんぱん、と手を叩きながら、ジェニ、と呼ばれた女性はラティーファに向き直った。

「……貴女が、救国の神子様……？」
「あ、え……はい…？」

まるで品定めするように、ジェニの目が細くなる。　ラティーファはぎゅっと両手を握り締めて息を止め、相手の出方を窺った。

「……何てこと……！　これじゃあ、まるでお人形さんじゃない！！！！！」

にゅっと白い手が伸びてきたかと思うと、ラティーファの身体はあっという間に抱き締められてしまった。

ああ、いい匂いなんて思っていたのもつかの間、ジェニの大きな胸

に顔を埋めるはめになり、ラティーファの呼吸はどんどん苦しくなっていく。
そこから救ってくれたのは、さっき勘違いで蹴り飛ばされたリヒルだった。

「ジェニ！！　彼女が死んでしまう！！！」
「あっ……ご、ごめんなさい！」

顔が胸元から離れると同時に、ラティーファは肩を上下に揺らして息を整えていく。

「……び、びっくりした……」
「本当にごめんなさい、えーと……神子様？」
「ラティーファと申します」
「ラティーファ様！　これから、貴女のお世話をさせていただきます、ジェニ・シェリードと申します。　ジェニ、と呼んでくださいね」

間近で見るジェニは、とても肌が白く、明るい緑の瞳と癖のある金の髪をすっきりと一つにまとめていて、男性に蹴りを入れるような女性には決して見えなかった。

「よ、ろしくお願いします…ジェニさん」
「ジェニで結構ですよ、ラティーファ様。　それよりも、リヒルに何を言われたのです？　いじめられたのではないですか？！」
「そんなことありませんっ…私が、私が勝手に泣いてしまったんです！　それをリヒルさんが慰めてくださってて……」
「そうなのですか？　あら、てっきり」
「ジェニはいつもそうだね。　私の言い分を決して聞きやしない……」

はぁ、と大きなため息をつきながら、リヒルは肩をすくめた。　くだけた言葉遣いに、ラティーファが首を傾げる。

「あら、説明してなかったのですね。　私とリヒルは双子なのです。非常に不本意ですが、リヒルが兄で私が妹、ということになっています」

「不本意とはなんだ、不本意とは。　……ああ、申し遅れました。私はリヒル・シェリード。　騎士団の副団長をしています」

よくよく見ると、瞳や髪の色がとても似ている。

リヒルはその話し方と、わずかに目じりが垂れているせいか、優男のような感じがするが、ジェニはつり目で背も高く、メリハリのある女性らしい身体つきのせいか、気が強そうな雰囲気が漂っている。

まさに正反対の美形・美人兄妹、といった感じだ。

「それでは、ラティーファ様。　あとはジェニが全てお世話させていただきますので、私はこの辺りで失礼しますね」

「は、はい！　今日は、色々とよくしていただいて、本当にありがとうございました」

椅子から立ち上がったラティーファは、勢いよく頭を下げる。　その様子を微笑ましげに見ると、それでは、と言い残してリヒルは扉の向こうへと姿を消した。

7．初めての…

シェリード兄妹の会話にやや気後れしていたラティーファも、ここへきて心はようやく落ち着いてきたようだ。

「さて、と。　ラティーファ様、お疲れでないなら湯浴みに参りましょうか。　お召し替えはそのときに致しましょう」

「は、はい…」

しかし、にっこりと笑うジェニの表情に、一抹の不安を隠すことは出来なかった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ほかほかと湯気の上がる大理石で出来た部屋。　中央にある大きな石造りの浴槽には、見たこともないくらいのお湯で満ちており、ラティーファは動きを止めていた。

「さあ、その服は脱いでしまいましょう。　……ラティーファ様？」
「す、すみません……こんな場所、初めて見たので……」
「まあ、そうなのですか！　心配いりませんわ！　全て私にお任せくださいねっ！」

ジェニはとても嬉しそうに笑った。　しかし、その手は容赦なくラティーファの服をはいでいく。
日に焼け、痩せた傷だらけの身体が露わになっていくにつれ、ラティーファはこれまで感じたこともないくらいの羞恥を感じていた。
とはいえ、いくらラティーファが静止しようとも、ジェニの手が止まることはなかったが。

裸に剥かれたラティーファの身体は、湯をかけられたあと、真っ白な泡に包まれている。

「ジェニ、さん……聞いてもいいですか？」
「ジェニ、で構いませんのに。　私に答えられることでしたら、どうぞお聞きになってください」
「救国の神子って、何なんでしょう……？」

身体の隅々を優しく洗い上げていく感覚に、ラティーファの身体の力は徐々に抜けていく。

「私も知っているのはおとぎ話程度で、詳しくは存じません。　ただ、昔から国が危うくなると、どこからともなく神子様が現れ、国を乱している原因を除いてくれるとか」
「では、この国……グリューエルン国は、危機に瀕している、と……？」

更に視界は狭くなっていく。

「ええ……それも、国王本人に影響が出てきているのです……あら？　ラティーファ様？」

かくん、と首が大きく揺れる。　どうやら、ラティーファの疲労はここで限界に達してしまったらしい。
ジェニはラティーファの身体が湯に沈み過ぎないように気をつけながら、慎重に身体や髪を洗う。

「神子様、か……今までどんな苦労をしてきたら、こんな身体になるの……？」

大小様々な傷のある身体を痛々しい表情で見ながら、ジェニは呟いた。

「この子は、この国の抱える大きな傷や病を本当に治すことができるのかしら……ねえ、神子様……？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7788t/

熱砂の国の舞姫と緑の国の王

2011年10月1日09時30分発行